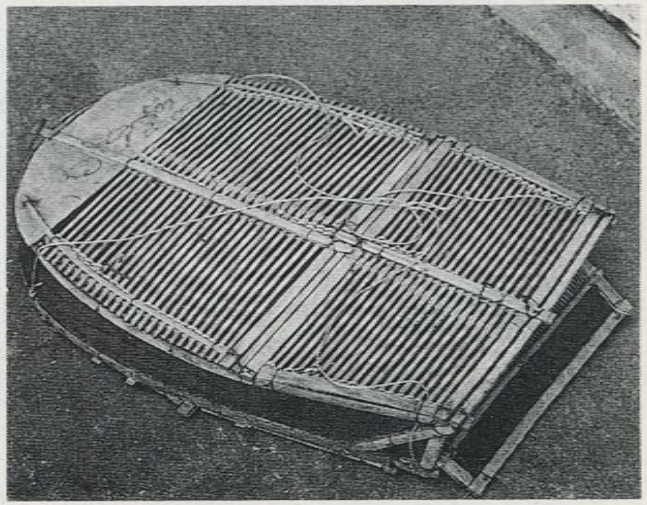
ふるさと資料紹介 ⑨

川とともに生きる (3)

江戸時代の古い記録によると飛騨、木曽川筋の村々では、鮎（アユ）、鱒（マス）、鯉（コイ）、鈔（スナクジ・ハゼ）が数多く生息していたことがわかっています。下米田・小山村では、漁猟に対する税が課せられていました。また、川合や小山の船が運んだ江戸屋敷への上納品の中に「塩鮎」が含まれており（以上『川辺町史』『美濃加茂市史』による）、当時の盛んな漁業の様子がうかがえます。

人々は川の状況や魚の種類によってそれぞれ漁具や漁法を工夫してきました。

左の写真は、飛騨川で使用されていた舟によるスナクジ用の網です。網の部分は絹製でハンノキの皮で茶色に染められています。その他、網の深さを変えるなどしてアユ、モロコ用など魚の種類でそれぞれ使い分けられています。



ウケ（川に沈めて魚を獲る）

市域は、そのほか蜂屋川、加茂川、川浦川など魚を獲るのに適した川があり、地域に合わせた漁法があったと思われます。

川漁に関する情報を是非お寄せください。

今回、次の方々から貴重な資料を市教育委員会に寄贈いただきました。ありがとうございました。（平成三年五月分）

●**イトリ**（船に入った水を汲み出す道具）ほか一点
（渡辺元市さん／川合町）

●**昭和初期のカメラ**　ほか一点
（佐光　篤さん／太田町）

近い将来の博物館建設に向けて情報や資料を集めていますので、市社会教育課（内線三六一）までご連絡ください。